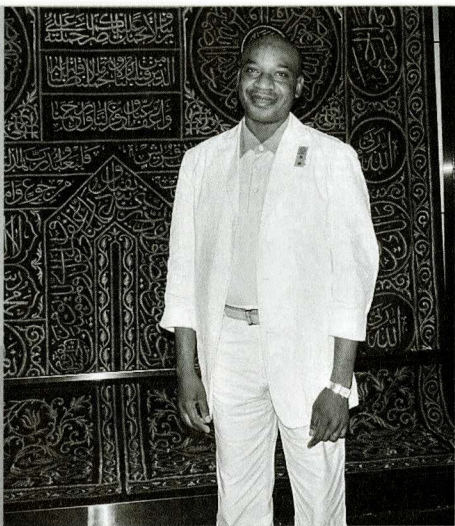


民博を訪問したバカリさん  
(2006年9月)



バカリさんの広州の事務所には、  
さまざまな商品のサンプルが置かれている



オフィスビル(写真中央)はほとんどが  
アフリカ商人の事務所である  
(2005年 中国・広州)



ソニンケ商人が経営する電化店。中国から  
買い付けてきたものが多い(マリ・バマコ中心部)



マリの商店で見つけた  
世界各国のジュース

## 外国人 と生きる

### あるソニンケ商人の人生 —アフリカからアジアへ

三島 禎子 (みしま ていこ)

本館民族社会研究部

#### 香港に住んで二〇年

数年前からアフリカ出身の商人を追っかけて、世界の各地を訪ね歩いている。自らを黒いユダヤ人と称するソニンケ民族の商人は、今や地球上のあらゆるところに拠点を置いて、大陸間をまたがった商売を営んでいる。

わたしがバカリ(仮称)さんに出会ったのは、二〇〇〇年の香港であった。バンコクでソニンケの知人に聞いた電話番号を頼りに連絡をとり、重慶大廈(チヨンキンマンション)という雑居ビルの前で待ち合わせをした。この雑居ビルは、ちよつとのぞいだけでも世界各国の人が出入りしていて、一体ここはどこだろうと思うようなおもむきである。もちろんアフリカ出身者の姿もたくさん見かける。いったんなかに入ったら別の世界に足を踏み入れてしまふのではないかなどと想像しながら不安な面持ちでわたしが待っていると、バカリさんはにこやかな顔で近付いてきた。

夏なのにジャケットを羽織ったバカリさんに連れられて行った先は、香港の高級ホテルとして名高い九龍香格里拉酒店(シャングリラ・ホテル)の喫茶であった。運ばれてきたオレンジジュースを飲みほして、氷が融けてしまったあとも、そんなことを意に介さない様子でバカリさんは話を続けた。わたしが聞いたのは、彼の半生についてであった。

当時、香港に事務所を構えていたバカリさんは、アフリカからアジアに渡ってきた

商人のなかではいちばんの古株であった。衣服や電化製品などの商品を買って付けるアフリカの商人と、香港や中国の生産工場を取り次ぐ仲介を中心に、貿易の便宜を図ったり、支払いを代行したりして、手広く商売を営んでいた。彼の顧客たちは、コンテナ単位で貿易をおこなう商人がほとんどである。香港に買い付けに来たり、電話で注目してくる商人は多いが、物価の高い香港に住みついていてアフリカ出身の商人はほんの数人である。バカリさんは無期限の滞在許可証をもち、もう二〇年あまり香港に住んでいる。

#### 異国で資金稼ぎ

しかしながら、商売の出だしはほんとうにささやかなものだった。どうしても父や兄のように商いをやってみたくて、七歳のころからお小遣いを手にすると飽やたばこを買って、別のところでそれらを売って利鞘を稼ぐまねごとをしていた。バカリさん自身はコンゴ共和国に生まれ、父母の故郷のマリで少年時代を過ごしたが、兄たちはコンゴに残ったり、コートジボワールやパリに行ったりして、みな商いにたずさわっていたのである。

父親はバカリさんを手元に置いておきたかったが、バカリさん自身はどうしても異国に行ってみようという気持ちを抑えきれず、家を出してセネガルへ行った。そこで家事手伝いをしたり、農業労働をしたりして、

小金を貯めた。いったん故郷に戻ったが、コートジボワールの首都アビジャンにいる従兄を頼って、父には黙って再び家を出た。

パスポートも身分証明書ももっていないが、子どもだったせいかわりに問題にならなかった。アビジャンでは従兄が金銀の商いを営んでいて、商売のノウハウを教えてくれた。その後、ガボンの建設現場で稼げるという話を聞いたので、ガボンがアフリカにあるということも知らずに出かけた。自分のお金を稼ぐというこじか頭になかったという。

このとき貯めたお金で、やっと自分の商いを始めることができた。アビジャンに戻ったが、自分が生まれたコンゴという国を知りたくて、兄を頼ってブラザビルへ行くことにした。ここでは衣類の商いをした。泥棒に入られて、商品をすべて失ったこともあったが、露天市場で商品を広げるようなところから再出発した。

#### 民族と家族の歴史を担って

しばらくして再び店がもてるようになったころ、香港や台湾に行つて商品を買って付けるソニンケ商人がいるという噂を耳にした。バカリさんには聞き逃すことのできない情報である。早速、香港へ行こうと考えた。

まず、安い航空券が買えるというナイジエリアへ行き、そこからブリュッセルに飛び、ムンバイ経由で香港にきた。英語はまったくわからなかったが、ナイジェリアで出会ったソニンケ商人が、香港での取引先を紹介してくれた。バカリさんは衣類や旅行靴などを買って付込み、コンゴに送り出した荷物は二、三日ですべて売り切れた。

「やっとやるべきことが見つかったと思えたのは二七歳のときだった。それからはいいことばかりではなく、だまされたり、荷を失ったり、いろんなことがあった。近年の中国経済の発展ともなつて、中国本土では香港に代わつてより安い商品が入手できるよつになつたため、買い付けに来る商人も香港を素通りするよつになつてしまった。しかたなくバカリさんも拠点を広州に移したが、家族は香港に住み続けている。

バカリさんに国籍を聞いてみた。「マリ人だ」という。それは、マリ共和国という国家が発行するパスポート所持者であることを示すのだが、同時に、西アフリカの古代王国「マリ王国」の末裔だということの意味している。ちなみに、彼はコンゴ共和国で生まれたから、コンゴのパスポートももっている。さらに香港の返還以前に取得した無期限の滞在許可証の持ち主でもある。

夢に見た異国への冒険を経て、商売を基盤に、バカリさんは自分の人生を作り上げてきた。そこには父や兄たちを追い抜きたいという野心と、ソニンケという民族社会のなかで尊敬される人物でありたいという願望が織り込まれている。自らを誰かと問うとき、バカリさんにはイスラムへの信仰とともに、民族と家族の歴史を担っているという自負心が支えられているよつに思えた。